

レオンハルト・ラガーツにおける神の国と キリスト教社会運動（上）

内 田 博

はじめに

スイスのプロテスタント神学者でキリスト教社会主義者でもあったレオンハルト・ラガーツの思想は、同時代のスイスの神学者バルトとの関連や、最近では解放の神学との関連で注目を集めているようだが⁽¹⁾、本稿は、そうした視角からラガーツの思想を検討するものではないし、ラガーツ研究に新しい視角を提供しようとするものでもない。ヘンリエッテ・ローラント・ホルスト研究にとって必要な素材の一つとしてラガーツの思想を扱うというのが、本稿の課題である。

すでに別稿で簡単に触れたように、ヘンリエッテ・ローラント・ホルストは、マルクス主義と社会民主主義を、近代の計算合理性に骨の髄まで侵された思想・運動であり、したがって資本主義を克服しえないものであると批判して、1930年代には生活形態形成としての社会主義を標榜するに至った。それは、ベルンシュタイン風に表現すれば運動としての社会主義であり、何らかの最終目的を設定して、それに向けた目的合理的行動を組織するといったタイプの社会主義ではない。反資本主義的な生活スタイルを資本主義社会の内部でできるだけ追求すること、そうして形成される生活領域を相互に連絡させる努力を続けること、これ自体が、ローラント・ホルストにとっては社会主義であった。その行動指標は、できるだけ商品関係に侵されない生活を送ること、とりわけ帝国主義の時代にあっては、反帝国主義、反植民地主義、反戦、反軍、反暴力につらなる生活を個々人の可能な範囲で追求することであった。これがなお社会主義と呼ばれうるのは、この立場が、資本の支配を人間の尊厳にとっての桎梏であるとする立場を、マルクス主義や社会民主主義と共有しているからである⁽²⁾。

すぐに見て取れるように、こうした行動指針は、例えば徴兵拒否で名高いメノー派の生活信条に近いものである。また、再改革派教会とは別の意味でプロテスタント原理主義を背景に持つ、オランダのキリスト教社会主義や無政府共産主義の信条とも重なり合うものであった⁽³⁾。オランダ社会のこうした思想環境を背景にして、ローラント・ホルストも、生活形態形成としての社会主義が要求する生活意識の形成のために、宗教感情に一定の役割を与えようとした。その際に大きな役割を果たしたものに、トルストイやガンディーといった巨人の思想と並んで、ラガーツとの出会いがあった。

本稿では、この出会いの意味を確定するのに必要な限りで、ラガーツの思想を整理する。

第1節 ラガーツの生涯とキリスト教社会運動の問題意識

レオンハルト・ラガーツは、1868年7月28日に、山村ターミンスの農民家庭に生まれ、1945年に保養先のウンターエーゲライで死去した。彼は、スイスとドイツで神学教育を受けた後、フレルデン、クア、バーゼルで牧師を務めた。クア時代(1895-1902)にすでに社会問題に関心を示し、労働運動組織とも接触していた。バーゼル時代には、1903年の建設労働者のストライキに際して、「石工ストライキに関する説教」を行い、こう述べている。

「社会運動は……今日の出来事のなかで最も重要なものである。……それは、これまでの既存の諸関係を変える点で、宗教改革と同様に偉大であり、フランス革命よりも偉大である。それ故に、教会もこれについて沈黙することは許されない。……この新しい世界の生成を、それが福音の精神から生まれたにもかかわらず、公認のキリスト教が冷たくぼんやりと眺めているとすれば、地の塩は腐敗してしまうだろう。」⁽⁴⁾ ブラッセルとシュピーラーによれば、こうした発言の背後には、「神は、聖書のなかだけでなく、現実の力強い行為においても我々に語りかけてくる」という認識が隠されていた⁽⁵⁾。この認識こそが、ラガーツをキリスト教社会運動に向かわせることになった。

ラガーツによれば、例えば労働運動は、直接には、時短、賃上げ、安

全等の境遇改善を目指すものであるが、「しかし、こうした物質的な事柄の背後には、理念的な諸力が、すなわち、自由、魂、人格への衝動が存在する。」⁽⁶⁾ また、もう一つの重要な社会運動である女性解放運動も、女性の人権あるいは保護、産児制限あるいは中絶反対といった物質的な要求を掲げているが、さらにそれを越えて、「新しい人間を、新しい人間的尊厳を、新しい人間的共生を目指している。」⁽⁷⁾ これに対して、ラガーツにとっては、こうした目的の実現を阻止してきた最も大きな力が貨幣あるいは所有であった。所有諸関係が人間を階層序列化すること、貨幣が人間的交通を支配する疎遠な力としてそびえ立つこと、これらが、自由、人格、尊厳、共生を阻害しているとラガーツは考える。それゆえに社会運動は、根本的には、貨幣の権力に反対せざるをえない。「金銭崇拜のくびきをふるい落とすときに初めて、まさしく人間はその生を喜びとする。とすれば、社会運動は、その根底においては、福音の中心にある思想を、人間が神の子であり兄弟であるという思想を実現するものなのである。なぜなら社会運動は、物質的な不安や闘争に息苦しいほどに絡み取られているという状態から、人間の魂を救おうとし、そうすることで、神がわれわれをそうあるべく創造したところの栄光を全面的に開花させようとするからである。あなた達は、この目的が地上にどれほど実現できるのかを議論することはできる。しかし、そのために働くことがキリスト教の本質に属することを、否定することはできない。」⁽⁸⁾

このように、「石工ストライキに関する説教」のラガーツは、社会運動を福音の実現として理想化して捉える。そして、こうした社会運動に関わっていくことがキリスト者の義務であると宣言する。「キリスト者は……最も広くかつ深い意味で社会主義者でなければならない。というのも、『汝自身を愛するように汝の隣人を愛せよ』というキリストの偉大な命令があるからである。キリスト者は、我々が兄弟であり、兄弟として振る舞うことを知らねばならない。各人が自分自身の世話をし、神が万物の世話をするのではなくて、我々が神の子としてお互いに責任があるのだということを認識しなければならない。それゆえにキリスト者は、社会運動に対して、深い関心と心からの愛情をもって取り組まねばならないのである。」⁽⁹⁾ ビュスとマツトミュラーによれば、これこそが、ヘルマン・クッターの『汝らのなすべきこと』（1903）とともに、スイスにお

ける宗教的社会主義の登場を宣言するものであった⁽¹⁰⁾。

ラガーツは、1906年には『新しい道』を他の神学者とともに創刊し、キリスト教社会運動を、文筆・講演活動のかたちで開始する。当時の運動は、スイス社会民主党やその他の政党からは距離をとったものであり、市民に対する啓発活動が運動の中心であった。「キリスト者は弱者の側にある。したがって、社会闘争において高みを目指す者の側に立つ。……しかし、キリスト者は社会民主党員でなければならないというつもりはない。……社会民主党は、一定の詳細な綱領を備えた政党である。しかしキリスト教は、単純に一政党に手渡されてはならないのである。キリスト教はいかなる政党よりも大きいのである。社会運動もまた、社会民主党よりも大きい。一キリスト者としては、社会民主党とは……別の道を生きたいと思うし、そうすることで、より誠実で深いキリスト者であることができる」と信じる。⁽¹¹⁾

このような社会民主党との距離の遠さは、ラガーツにおいては、公認のキリスト教界との近さを反映したものであった。実際にラガーツは、1908年にはチューリヒ大学において組織神学の教授となり、牧師の養成にも力を尽くすことになる。しかし、1912年のチューリヒにおけるゼネラルストライキをきっかけに、公認のキリスト教界に対する批判を強めることになる。

このチューリヒのストライキは計画されたものではなかった。塗装工や錠前師のストライキに対して、経営側がドイツからスト破りを導入したこと、彼らが武装していて集会中に発砲し労働者を負傷させたことなどに刺激されて、社会民主党系労働者が突発的に起こしたものであった。ラガーツは当初は、このストライキを挑発に乗ったものであり、戦術的な誤りと見なしていた。

しかし、彼がそこに見たのは、一方では、ストライキ参加者の境遇に対する市民層の無関心で、憎悪であった。「痛ましいほどに恐ろしいのは、この機会に、我々の市民社会が示した社会的な思考と感情の欠落である。あたかも、これまでに社会運動なぞ存在したことがなく、わが市民には社会問題について考える機会がなかったかのようである。……社会的な思考や感情の欠落と手を携えているのは、社会主義的労働者層に対する不信、軽蔑、憎悪である。……この憎悪には、あきらかに見て取

れる原因がある。労働者達が、権利を要求せず、自分たちの奴隷的境遇を揺さぶらないほどに、すごくおとなしければ、彼らは労働者に一定の好意をもったかもしれない。また、自分たち自身が儲けは多い方が良いのだから、労働者がより多くの賃金を要求することもわかる。しかし、労働者がさらに進んで、我々と同じように自由な男として振る舞うようになると、大きな道徳的憤りが生じるのだ！……我々の市民社会は、……彼らがあたかも一種の奴隷階級であり、そうある続けるべきだと考えているのである。その好意は、労働者が自由を要求するところで、止むのである。」⁽¹²⁾

ラガーツにとっては、こうした市民層の態度は、キリスト教にも責任の一端があった。スト破りを指揮したのはカトリックのキリスト教社会派であったし、教会は傍観することで、教区民である市民の社会感情に訴えることを怠ってきたからである。「我々の公式の宗教性が完全に否定されたのは明らかである。教会はどこにいたのか？ さらにいえば、人間のことを深く理解しようとする気持ちや能力が教区民のなかにあったら、宗教的な義務感があったら、このような表面的で自己欺瞞的な仕方では社会問題を片づけることはできなかつたろう……。今日の状況は、我々の教会とキリスト教の失敗である。我々の社会は、最も内的なところまで狂っている。それはおそらく、社会が無神論に一理論的ではなくて、実践的に無神論だという意味だが一なっているからである。」⁽¹³⁾

このような批判を踏まえて、ラガーツは1913年に配偶者とともにスイス社会民主党に入党する。入党後は、キリスト教批判はさらに強まる。1921年には、公認のキリスト教界に人材を供給する神学部教授の任に耐えられないとして、チューリヒ大学を辞職するに至る。当時のラガーツによれば、「教会が目指すのは神の国である。今日、我々に押し寄せてくるのは、一方では精神的、政治的、社会的な世界の危機であり、他方では、キリストの現実的な後継者の力、方向、可能性を新たに認識することである。私が思うには、今日の公式のキリスト教の全存在は、その徹底的に世俗的であるか、単に形式的にのみ宗教的なあり方は、キリストの事柄の持つ意味に照応していないし、信仰による世界の克服という課題に目覚めてもいないのである。」⁽¹⁴⁾

ラガーツは、このようにして公認のキリスト教界の解放的機能を否定

する。かれにとって、それはむしろ抑圧的機能すら示しているのであり、おなじく 1921 年にこう述べている。「私がここで神学と考えていて、これまで闘ってきたし、これからも闘おうとしているものは、直接的な行為と経験に取って代わる宗教的思想体系のことである。こうした神学は、…最も危険なものの一つであり、しかも……現実の神と神の国から若者をそらせるのに、最も確実な手段であるという感情を、私はつねに抱いてきた。」⁽¹⁵⁾そして、1922 年の『世俗国家、宗教、神の支配』において自己の立場を体系化し、キリスト教を含む宗教に「テオクラシー（神の支配）＝神の国の実現」を優越させる独自の神学（彼自身はもはや神学とは呼ばないが）を構築する。そこで展開された思想が、次節で見るように、ラガーツにおけるキリスト教社会主義の核心となるのである。いまやラガーツにとっては、「宗教は、自己目的化され、神の国の不在を宗教で隠すことによって、神の代理となる。……宗教は自己保存を願うようになる。宗教は、いまや神によって、生き生きとしたものによって生きるのではなく、自分自身によって生きるのだから、そのためのあらゆる手段を追求する。宗教は世俗と結びつく。そこに保証を求めるのである。宗教は、貨幣に、宗教的あるいは国家的権力に、支配的な社会秩序や道徳に、場合によっては支配的な不道徳にも支えられる。その代わりに宗教は、それらに精神的な保護を与える。宗教は、それらを聖別し、許しさえ与える。それによって宗教は、保守的な権力となる。」⁽¹⁶⁾宗教の既成性に対するこうした批判を踏まえて、ラガーツは自己の立場をテーゼ風にこう表現している。すなわち、「宗教は反動の最強の力であるが、……神の国は革命の最強の力であり、歴史の最強の推進力、内奥の生の不安である。」⁽¹⁷⁾

こうした公認キリスト教批判とは裏腹に、社会民主党系労働者と社会民主党に対するラガーツの評価と期待は高まる。1912 年のゼネストに関しても、ラガーツは、ストライキに参加した社会民主党系の労働者達に、市民層とは対照的な高い道徳性を見た。それは直接には、労務管理上も大きな問題であった飲酒癖をストライキ中の労働者が克服していた点に現れていると、ラガーツはいう。「15,000 人から 20,000 人の部隊を、しかも根本的に異なった民族性を持つ部隊を、平和的な戦闘のために正しく指導するには、周到さ、献身、組織技術、指揮能力が不可欠である。

……『労働者諸君、最大の敵アルコールをやめよう！』とスローガンにあった。……暑い街路を通った力強い長いデモ行進が目的地に着いた時、『ビールがあるぞ！』という何百もの声が聞こえたが、そこで見たのは、ビールが手渡されるのではなくて、水やアルコールを含まない飲料で渴きをいやさねばならない、ということであった。……こうさせたのは理念の力である！ 市民大衆にこのような倫理的な能力が備わっているかどうか考えてみるがいい。私は、禁酒という真理と労働者大衆との印象的な関わりが、……ゼネラルストライキの三倍以上の価値があると、あえて主張したい。』⁽¹⁸⁾

社会運動を理想化していたラガーツは、このようにその最大の担い手であった社会民主党をも理想化して、入党を決意したのである。実際に1917年には、ラガーツはこう述べている。「プロレタリアートは、その悲惨さにおいて、市民的、キリスト教的世界の申し子である。かれらの状態、存在が、それらに対する強力な告発なのである。我々は、この告発に耳を傾けねばならない。……それゆえに我々は、社会民主党に入るのである。というのも、それが、プロレタリアートに対する信仰告白の唯一の現実的な形態だからである。……社会民主党に対する我々の信仰告白は、社会主義の事柄に対する信仰告白であり、社会の責任に対する、とりわけキリスト教の責任に対する信仰告白である。……社会民主党への我らの道は、政党への道ではなく、キリストの後継者への道である。』⁽¹⁹⁾

そして、従来の啓発活動の枠を越えて、キリスト者として社会主義的政治の立場に立つことを宣言する。「我々は、キリストの神の国と社会主義を必らず結合せねばならない。というのも、父なる神が人間のもとにあるということ、今日の経済秩序と関連させて考えることは不可能だからである。今日の経済秩序が、相互的搾取の世界を意味しているのに対して、キリストの世界は愛の世界だからである。資本主義社会は、盗奪の原理を基礎とするのに対して、神の国の原理は友愛である。今日の世界は、これまでに存在したどの世界よりも、万人の万人に対する闘争を、公然かつ原理的なものにし、その結果論理的に世界戦争に至ったのである。これに対して、新しい秩序においては、相互扶助の掟が支配する。今日の世代が好きでたまらないのは権力、すなわち人間に対する人

間の支配であるのに対して、神と魂を再び見出した世代の新しい幸福は、奉仕であるだろう。今日の時代にあっては、人間にとってマモンが神であるのに対して、この時代の恐怖と痛みのもとでは、……神が再び神となる。」⁽²⁰⁾

しかし、これはラガーツが社会民主主義を支持したことを意味しない。「われわれが社会民主主義に転向するのだと思いこんだとすれば、それはまったくまちがっている。……神の国は社会民主党からは独立しており、また、社会民主党よりも無限に偉大なのであり、……そうした神の国を信じるから、我々は社会民主党のなかに可能性と推進力を見るのである……。社会民主党は、我々にとって、キリスト教徒全体の腐敗の徴であり、神の国の新たな到来の要求なのである。それは、暫定的な、隠された、いや倒錯した形態であって、ひとたび正しい形態が登場すれば滅びねばならないものである。それは、神の力強い警告である。それが表現するのは神の国のすべての真理ではないが、このすべての真理を、我々は社会民主党の背後に見る。」⁽²¹⁾

このようにラガーツは、神の国を地上に実現するという原理主義的な立場から、社会主義の立場を選択し、社会主義実現の担い手として、誤った形態をとっているとはいえ神の国の真理性を体現するとみなされた社会民主党を選択したのである。

こうして公認キリスト教から離れ、社会民主党に入党したラガーツには、ある倫理的な問題が課されることになる。それは、目的による手段の聖化が許されるのか、という問題である。すでに述べたように、ラガーツは、社会民主主義を信じて入党したわけでも、かつて社会民主主義の代名詞であったマルクス主義を信じて入党したわけでもない。以下の引用にあるように、社会民主党の運動は、ラガーツにとっては、「アンチ・キリスト」という邪悪な、不正な形態すらとるのである。「運動が反宗教的な、まさに反キリスト教的な形態で現れるということは、我々にとっては、いずれにしろ軽い問題ではない。……しかし、我々はそうした状況を理解している。……キリスト者は、神を、キリストを、宗教を、既存の世界に結びつけ、到来しつつある新しい世界に対して最も熱心に闘ってこなかっただろうか？ 新しい世界が……このような神、このようなキリストに反対することが、宗教に反対することが驚くに値するだ

ろうか？ これは深刻ではあるが必然的な、いや聖なる誤解である。この誤解はやがてとけるに違いないが、それは、その課題が果たされたときである。そのあいだ、我々は、神とその国（あるいはキリスト）が隠れて、アンチ・キリストの装いでさえ現れるということをして、学ぶのである。社会民主主義の信仰は、キリストへの信仰—新しい世界への、正義と善の世界、救済の世界、人間の世界、したがってまた神の世界への信仰—ではないか？ それは、神が大いなる希望であり、真の神と神の人間が、神の国と人間の国が一つであるという聖書の意味において、神への信仰ではないか？」⁽²²⁾

1917年に書かれたこの文章では、神の国の実現という目的が社会民主党という手段を聖化するという立場が貫かれている。しかし、1919年の『社会主義と暴力』では、このような楽観的な立場は放棄される。というのも、ロシア革命によるボルシェビキ政権の樹立が、社会主義の実現手段としての暴力の正統性というきわめて突出したかたちで、目的—手段関係の倫理問題を提起したからである。ラガーツは、すべての暴力を否定する絶対的な非暴力主義の立場をとらない。しかし、手段が目的を破壊することがあること、それゆえに目的が手段を拘束すること、暴力は、社会主義という目的—ラガーツにとっては、人間の尊厳と民主主義を実現して、神の国のこの世での実現に近づくことである—を破壊する不正な手段であることを、ラガーツは、きわめて素朴なかたちではあるが主張するようになる⁽²³⁾。

そして、社会主義における暴力の問題がスイスで現実的に突きつけられたのが、ナチの侵攻の危険をまえにした祖国防衛という1930年代の問題であった。ラガーツが所属していたスイス社会民主党は、1935年の党大会で、武力による祖国防衛を承認した。これはラガーツにとっては、社会主義への裏切りであった。彼にとっては、それは、軍国主義と同じ地盤に立つことによる軍国主義への屈服であった。そして、ブラッセルとシュピーラーによれば、第一次大戦、ロシア革命、ファシズムを経験した当時のラガーツにとっては、反軍国主義は、人間の尊厳を徹底的かつ制度的に破壊する点で、「社会主義が政治の天候に合わせて着たり脱いだりできる衣装ではなくて、社会主義の魂なのである」⁽²⁴⁾ ラガーツはこうして、1936年には社会民主党を離党し、以後は死ぬまで、ふたたび『新

しい道』を拠点に、政党とは分離した形でキリスト教社会運動を続けることになった⁽²⁵⁾。

このようにラガーツの生涯は、神の国の地上への実現というユートピアをできる限り追求すること、その目的に適合する手段を求めて、既存のキリスト教界を批判し、社会民主党に入党し、暴力革命を批判し、社会民主党を離党するといったように彷徨するというものであった。この点で、次節以下で検討するように、彼の思想の核心は、神の国に対する彼の理解にある。そして、そこが彼とローラント・ホルストとの思想的な共鳴板になるのである。

[注]

- (1) ラガーツ研究の現状については、Kim Hee-Eun, *Das Verhältnis zwischen Christentum und Marxismus-Leninismus bei Leonhard Ragaz in seiner Bedeutung für die Minjung-Theologie*, Frankfurt a. M. 1991, S. 22-26 を参照。
- (2) 私の論文「ヘンリエッテ・ローラント・ホルストにおけるマルクス主義との対決」『藤女子大学・藤女子短期大学紀要 第II部』第33号(1995年), 12-13 ページを参照。
- (3) この時代のオランダにおける宗教的社会主義については、例えば、Jochheim, G., *Antimilitaristische Aktionstheorie, Soziale Revolution und Soziale Verteidigung*, Assen/Amsterdam 1977 の第4部と第5部を参照。
- (4) Ragaz, L., *Maurerstreikpredigt* (1903), in: ders., *Eingriffe ins Zeitgeschehen*, Luzern 1995, S. 29-30.
- (5) Brassel, R./Spieler, W., *Einleitung der Herausgeber*, in: Ragaz, L., ebd., S. 17.
- (6) Ragaz, L., *Mauerstreikspredigt*, a. a. O., S. 32.
- (7) Ebd., S.
- (8) Ebd.
- (9) Ebd.,
- (10) Vgl. Buess, E./Mattmüller, M., *Prophetischer Sozialismus*, Freiburg 1986, S. 78.
- (11) Ragaz, L., *Mauerstreikspredigt*, a. a. O., S. 30-31.
- (12) Ragaz, L., *Der Züricher Generalstreik von 1912*, in: ders., *Eingrif-*

- fe ins Zeitgeschehen*, a. a. O., S. 106-109.
- (13) Ebd., S. 110.
- (14) Ders., Warum ich meinen Professur aufgegeben habe (1921), in: ders., *Eingriffe ins Zeitgeschehen*, a. a. O., S. 55.
- (15) Ebd., S. 54.
- (16) Ders., *Weltreich, Religion, Gottesherrschaft* (1922), in: ders., *Eingriffe ins Zeitgeschehen*, a. a. O., 62-63.
- (17) Ebd., S. 63.
- (18) Ders., Der Züricher Generalstreik von 1912, a. a. O., S. 103
- (19) Ders., Unser Sozialismus (1917), in: ders., *Eingriffe ins Zeitgeschehen*, a. a. O., S. 116.
- (20) Ebd., S. 112.
- (21) Ebd., S. 116.
- (22) Ders., *Unser Sozialismus*, a. a. O., S. 114.
- (23) 例えば、そこでラガーツはこう述べている。「社会主義と暴力の利用は、根本的に鋭く矛盾する。社会主義は、人間に、まさにいかなる人間にも……価値があり、神聖であるという基本的な感覚に基づいている。それは、人間が、人間の自由に敬意を表して生活し生きている……ということの別の表現にすぎない。……人間は自己目的であって、疎遠な目的の手段ではないのであり、たんなるモノや商品ではなくて、その固有の本質に、すなわち人間存在に無条件の根拠を持つ価値を持つのである。言い換えれば、人間は聖なるものであり、ある意味では、聖なる唯一のものなのである。こうした根本感情からして、社会主義は、あらゆる奴隷制に対する仇敵なのである。また、この根本感情から、社会主義は戦争に反対する。反軍国主義は社会主義の内的本性にふさわしいのである。……人間の生は社会主義にとって無限かつ無条件に価値あるものであり、それゆえに社会主義は自由の運動なのである。」(*Ragaz, L., Sozialismus und Gewalt*, in: ders., *Eingriffe ins Zeitgeschehen*, a. a. O., S. 125-126.) こうしたラガーツの問題意識が、『倫理と共産主義』において、社会主義と暴力の問題を検討したローラント・ホルストとの出会いを準備することになる。
- (24) Brassel, R./Spieler, W., a. a. O., S. 100.
- (25) 『新しい道』は、スイスにおけるキリスト教社会主義運動の機関誌として、現在も存続している。